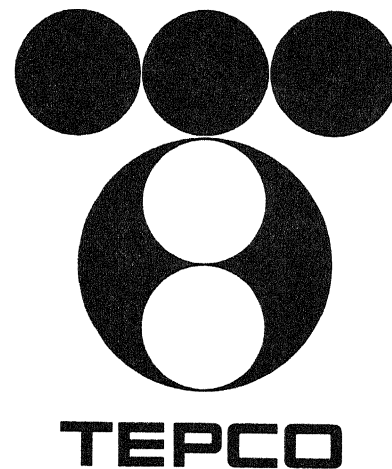
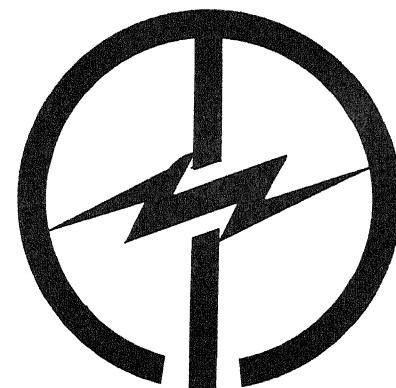


郡内電力史

市



渡 邊 保 著

谷村発電所

○縦形長軸水車

甲州財閥の一方の雄、雨宮敬次郎は電気事業の将

来性に着眼し、

明治二十八年

(一八九五)

九月、桂川水

力発電発起人

会を発足させ

桂川開発に乗

り出した。こ

新装なった谷村発電所

の発起人会は

名ばかりのも

のであったら

しくしばらく

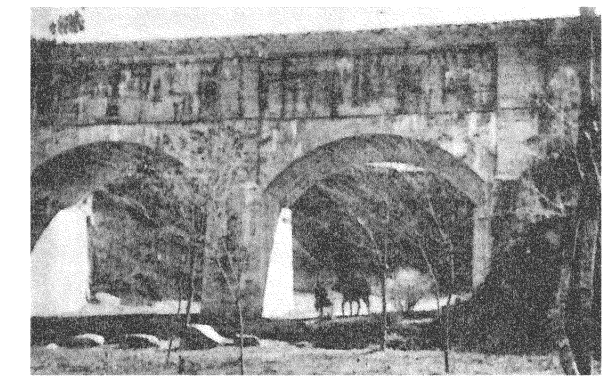
はなんの動き

もなかったが、明治三十五年、雨宮敬次郎が熱心に
取りこんでいた東京市街鉄道会社の設立のメドがつ
いてからは、この鉄道に電力を供給する必要が生じ、
電気事業にも力を入れ始めた。即ち、明治三十五年
(一九〇二)十月、桂川上流に米倉水路の水利使用
許可を申請したのに続き、同年十月十日、雨宮敬次
郎外十二名の名義で谷村水路の水利使用許可を申請
した。

明治三十七年(一九〇四)二月十九日、桂川電力
創立委員長になった雨宮敬次郎は、同年二月十九日、
それまでに申請した倉見、鹿留水路も入れて四水路
を一括して申請し、同年六月十日、許可された。当
初の桂川電力の開発計画は、小発電所四水路の建設
を計画していたが、たまたま東京電灯で下流に建設
していた駒橋発電所が、明治四十年(一九〇七)十
二月、わが国初の大出力発電、長距離送電に成功し、
急速に技術が進歩したため、桂川電力も大容量発電
に計画を変更することとし、明治四十一年(一九〇
八)八月三十一日、既許可の四水路を第一水路鹿留、

第二水路谷村の二地点に変更する申請をした。この申請は明治四十二年（一九〇九）八月十八日許可され、翌四十三年（一九一〇）七月二日、兩宮敬次郎は、小野金六や安田善次郎等を加えて桂川電力株式会社を設立し、谷村町下谷一本地藏に出張所において活動を開始した。

桂川電力は、明治四十四年（一九一一）に設立された日本電灯に一刻も早く電力を供給しなければならなかったため、まず第一期工事として鹿留第一水路の建設から取りかかり、大正二年（一九一三）早くも一部運転を開始し、翌三年（一九一四）四月にはこれを全部完成させた。続く第二期工事の谷村第二水路は、東桂村十日市場天狗山と禾生村上境の二地点を谷村町下谷姥沢の一点に変更したことにより、発電所の位置が桂川から遠く離れてしまったため放水路設置に難点があり、水車軸を長軸に設計せざるをえなかった。ともあれ桂川電力は、大正五年（一九一六）十二月八日、谷村町、禾生村と発電用水路開設に関する協定を結び建設工事の準備に入



鍛冶屋坂水路橋

った。特に谷村町には、谷村電灯の三の丸発電所があるため谷村用水の分水量が問題となり、谷村電灯が使用許可をえている毎秒百個を基準として話し合い、谷村用水六個所の取入口と谷村町水道に必要な水量合計九九・五七個（二・七七^五）を分水することとなった。また、大正七年（一九一八）一二月開地村、同八年（一九一九）五月三吉村と発電用水路、道路堀削（鍛冶屋坂道路堀削の程度十二尺、元坂道路同十八尺）に関する協定を締結した。

大正五年五月、発電所工事、同七年一月水路工事に着手し、大正九年（一九二〇）十二月二十五日、竣工し、谷村町下谷道生堀に谷村開閉所を設置し鹿留発電所の発生電力と共に東京戸塚、六郷変電所に送電を開始した。

ちなみに創世期の谷村発電所勤務員は、事務所、

主任一事務員

一土木係員の

四名、配電盤

室、班長一助

手二の三名二

交替、発電室

班長一助手一

の二名二交替、

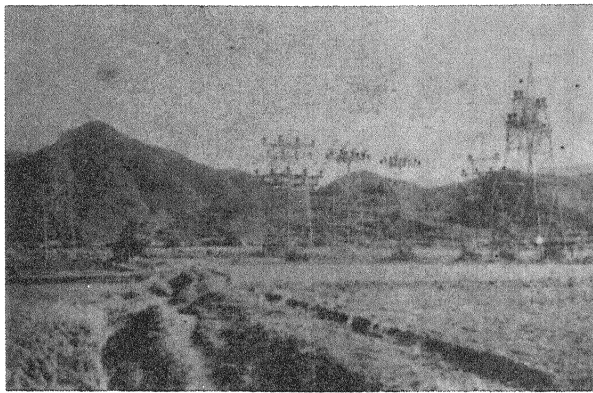
スラスト室、

日勤の助手一

名、水車室、

助手二名二交

替で勤務して



谷村開閉所

いた。
なお、昭和二十六年東京電力移行時の勤務員は所長以下三十八名であったが、昭和三十年以降の技術革新による設備の近代化と自動化が進み、ついに昭和四十四年十二月、駒橋発電所に集中化され無人発電所となったのである。

○柄杓流川、殿入川取水

明治四十四年から始まった東京電灯、日本電灯、東京市電のいわゆる三電の電力販売競争は大正六年に三電協定が成立しその幕を閉じるに至り、大正九年三月、日本電灯は東京電灯と合併したため、桂川電力はその存在意義がなくなり、東京電灯の若尾璋八と桂川電力の兩宮亘とが実の兄弟だったこともあり、大正十一年（一九二二）二月一日、東京電灯に合併した。

谷村発電所は、大正十二年の関東大震災では、幸い主水路の圧力隧道に亀裂が入ったためこの全長修理をただけで、発電設備には被害がなくその後も

順調に運転を続けてきたが、大正十五年頃から慢性的に渇水が続く、谷村用水への分水は確保しなければならぬ状況にあった東京電灯は、昭和九年（一九二〇）八月、渇水補給用として柄杓流川を取水する計画をたて、水利使用と工事実施認可の申請をした。この申請は昭和十五年（一九二六）四月認可されたが、戦時体制に入っていたわが国では、電力総動員体制をとらうとしており、溪流取水が奨励されていたため、昭和十五年八月十六日、柄杓流川上流の殿入川取水を追加計画し申請した。この申請は、翌十六年（一九四一）四月二十一日許可され、西桂村小沼から東桂村夏狩外森までの隧道が掘られポンプ揚水して桂川に通水された。

○幻の夏狩引水路

昭和十六年（一九四一）十二月八日、真珠湾の奇襲攻撃から太平洋戦争に突入したわが国は、昭和十七年に電力総動員計画を閣議決定し、電力総動員体制をとった。東京電灯は、昭和十七年（一九四二）

三月解散し、桂川系、笛吹川系発電設備は日本発送電に第二次強制出資されるところとなった。日本発送電は、この非常時を乗り切るため柄杓流揚水に続き、桂電灯の夏狩発電所が水利使用している夏狩用水を用水尻から桂川に疎水して、谷村用水に注入し、今まで谷村用水で使用していた桂川の水は谷村発電所取水口で取り入れ発電に活用しようとする計画をたてた。

日本発送電は、昭和十八年（一九四三）四月一日、谷村町と谷村用水使用について協議し、柄杓流川、鹿留川、並びに付近用水の利用承諾と一時払い補償六万一千円を支出する覚書を契約した。翌十九年（一九四四）二月十日、関東配電と夏狩用水使用について協議し、毎月一四五・二七二kWhと夏狩発電所の実際発生電力量との差の三倍に、当該期間の電力料金率を乗じて得たる金額を補償することで合意し、同年四月一日には、同社の三の丸発電所の出力減少に関して覚書を締結したが、この水利使用変更の計画は、上谷村農民の富士の湧水が多い夏狩用水の水

の水は田の稲作によくないとの強い反対を受け、交渉が難航して工事に着工することが出来なかった。

昭和二十六年（一九五一）五月一日、電力再編成により日本発送電より事業を継承した東京電力は、その年の十月十九日、桂川と夏狩用水大櫟川の水利使用は許可を受けているので、鹿留川は渇水補給用として取り入れ、既設谷村発電所水路に注水する水利使用変更計画と工事実施許可の申請をした。東京電力は、夏狩用水の流域変更を申請しないまま、同年十月、夏狩発電所水槽から田原の滝上までの隧道と鹿留川おなん淵上の水路橋「通称ピーヤ、PIRE、棧橋のこと」際の取入口建設工事に着手し、日に夜をつぐ突貫工事をすすめ翌二十七年（一九五二）一月二十日竣工した。しかしながら、地元民の反対は依然として強く、ついに通水することはないかった。なお、昭和二十九年に十日市場で隧道に陥没があり里道付け替えについて協議がされている。

○桂川神社

桂川神社は、谷村発電所を建設した桂川電力が、その竣工を記念するとともに、これからの社運の発展と安全を祈願して大正九年十一月五日建立した。ご神体は、桂川の水源が富士五湖及び霊峰富士山にあることから、北口本宮富士浅間神社のご神体で、美女の誉れ高い「木花開耶姫命」を分霊した。父神は「大山祇神」といい、治山治水の神様であることから、上流の鹿留発電所の守護神として祀られている。

桂川神社の例大祭は、五月、十月の春秋二回、地域の人達も参加して大変賑わったが、昭和四十四年十月、谷村発電所の無人化に伴って次第に訪れる人も少なくなり荒廃した。

地域から修復の声の高まる中で、六十五年経た昭和六十一年、谷村発電所本館建替工事中の安全を祈願すべく、七月末から修復工事に着手し、社殿、境内を一新して九月十日遷宮祭を完了した。

なお、桂川電力は当社の前身である東京電灯に大

正十一年二月一日発展的合併をしている。

また、当時、谷村発電所、鹿留発電所で発生した電力は、谷村線で、直接東京の戸塚と六郷に建設された変電所に送電され東京の発展に大変貢献した。両変電所には桂川神社からそれぞれ分霊した桂川神社を大正九年に建立し、三個所の神社でそれぞれ水力発電の発展と安全運転を祈願したといわれている。

大正九年十二月に谷村発電所を運転開始させた桂川電力では、水路建設工事で殉職事故が発生し、この霊を慰めるため庚申「大正九年」仲秋、「殉職者の碑」を発電所構内に建てた。また一説に、発電所運転作業の安全を祈願するため神社を建立し、上吉田の富士浅間神社の浅間明神大山祇神の女、木花開耶姫を祭り桂川神社と名付けた。桂川神社の境内には、桂川電力会長の雨宮亘が寄進した手洗い石と岩田作兵衛外の重役が寄進した灯籠があり、昔を髣髴とさせ、地元の人たちにも「お水神さん」として親しまれている。